わが町にも歴史あり

知られざる大阪

643

本能寺の変

高槻市、茨木市、豊能町

食うか食われるかの戦い

前回書き忘れたことがあった。ルイス・フロイスが高山飛騨守について述べていることだ。ある時、戦で60人の死者を出し、寄る辺のない女性や子どもたちが大勢残された。飛騨守は同情して、熱心に全員の世話をし、子どもはまるで本当の子どものようで、女性たちは近親者のようだった。

高槻の人々にとって、飛騨守は父だったという。

飛騨守はまた、貧しい者に衣服や食べ物を与えた。冬、城内の見回りをしていて、一人の兵士に出会った。その兵士が貧しく、寒そうにしているので、その家に行って自分が着ていた着物を置いてきた。家に帰った飛騨守に、妻のマリアが「今日着ておられた新調の着物をどうされましたか」と尋ねると、「主にお渡しした」と答えたという。

飛騨守の人柄を表す挿話だ。マリアはもちろん洗礼名で、高山マリアの墓というのが豊能町高山の山の中にある。草むらを進んで行くと、大木の根元に小さな墓石が四つあるのだが、不思議なことに三つが並び、一つはその後方の離れた所にある。江戸時代中期の元文、延享、寛延の年号が刻まれていて、法名から2組の夫婦だろうという。

高山マリアの墓と伝わる墓石。なぜか1基だけ離れて建っている＝豊能町高山で

豊能町生涯学習課の小嶋均さんによると「マリアは洗礼名でよくある名前で、右近のお母さんだけでなく、おばあさんもマリアだった。江戸時代中期ごろに、キリシタンで別のマリアという人がいたのでは」ということで、右近の母の墓ではなさそうだ。江戸時代のキリシタンとは、もちろん隠れキリシタンである。

話は前後するが、高山父子が高槻城を乗っ取った事件は、宣教師を驚かせたようだ。キリシタンの信仰からして、主君を追い出して城を乗っ取るなど、考えられなかったのだ。「高槻市史」は、高山右近が真実、信仰の生活に入っていなかったがためで、この事件で重傷を負って生死の境をさまよったのが転機となって、キリストの教えを自分の問題として真剣に考えたのではないか、と分析している。

確かに、キリシタンとしての逸話は城主となってから増えるが、それも父・飛騨守がいなくなってからの印象が強い。とはいえ、城の乗っ取りは右近の独断ではなく、飛騨守との共謀だから、右近一人の信仰の深い浅いに帰するのはどんなもんだろうか。なんといっても、食うか食われるかの戦国時代である。信仰よりも、自分が生き延びるのを優先するのは当然だろう。

食うか食われるかは、味方との間にもあった。時代は降るが、関ケ原の合戦（1600年）後、軍事的緊張が高まる。隣国との境界争いが原因で、築城ブームが起きるのだ。武士にとっては土地が命。中世からそれは変わらない。

右近にとって、茨木の中川清秀との関係がそれだった。お決まりの領地争いでもめるのだが、荒木村重が謀反を起こした時、翻意を迫る右近のことを中川清秀は「信じるな」と言っているそうなので、そもそも中川清秀は右近のことを快く思っていなかったのだ。

織田信長の扱いが違った、と中西裕樹・京都先端科学大学特任准教授は言う。「信長は中川清秀を重視して、清秀の息子に娘を嫁がせた。中国攻めが成功したら、2カ国を与えるという空手形を出している。私に言わせると、織田一門です。荒木村重の後継が中川清秀だったから、中川を重んじた」

対して、右近はどうか？

「羽柴秀吉の鳥取攻めの陣中に使わされて、報告をしている。信長は、右近を側近的に動かしているんです」。右近が軽視されたということではない。信長の側近は、できる武将でないと務まらないんだから。

右近びいきのルイス・フロイスは、中川清秀を「右近の大敵」という。そんな2人のライバル心が噴き出したのが、本能寺の変で信長が死した後、秀吉が仇を討った山崎の戦いだ。順を追って見ていこう。

1582年6月2日、本能寺で信長が明智光秀に討たれた時、右近は秀吉の中国攻めの加勢を命じられて、西に向かっており、高槻に不在だった。フロイスの「日本史」によると、「右近殿の妻のジュスタが幼少の子どもたちを抱えて、ほとんど見放された状態」だったが、「明智は勘違いして、右近殿は中国から帰ってくれれば自分の味方になるに違いないと考えていた」ので、ジュスタに対し「心配には及ばない。高槻城はあなたのものだ」と伝えた。それに対して、高槻方は美辞麗句の偽りをもって答えたというから、「味方します」と返答したのだろう。喜んだ光秀は人質も取らなかった。

茨木城の門が茨木神社に移設されたと伝わる。ただし、門の年代は不詳で、中川清秀がこの門をくぐったかどうかはわからない＝茨木市元町で

なぜ光秀は右近が味方すると考えたのか。同じように光秀があてにしていた細川藤孝は、共に足利将軍に仕えた仲だし、筒井順慶は光秀の与力だったが、「右近は光秀の配下ではない」（中西さん）。確証もなく右近をあてにしたところが、光秀の詰めの甘さと思える。

摂津の主立った武将は、右近のように毛利との戦いに出陣していたから、諸城を占領するのは簡単だったはずだが、それをしなかったのが明智の滅亡の原因だ、とフロイスは言う。

右近は、城も家臣も妻子も敵方に落ちているだろうと覚悟して高槻に戻った。ほかの城では、城主が不在をいいことに家臣や農民らによる略奪が横行したが、高槻では皆は自分の家を放置し、武器を取って城を守っていた。右近はただちに、明智の敵であることを宣言する。

【松井宏員】

＝次回は10月4日掲載